

令和 5 年度
次代の産業クラスター政策としての
「Local X Lab.」事業の発掘、磨き上げ実証事業

調 査 報 告 書

令和 6 年 3 月

経済産業省 近畿経済産業局
(調査委託機関：株式会社 地域計画建築研究所)

目 次

序章 本実証・調査の概要	1
(1) 背景と目的	
(2) 実証・調査フロー	
第1章 公開討論形式での委員会による Local X の要素検討	4
(1) Local X Forum（公開討論形式委員会）の概要	
(2) 各回の詳細と議論のポイント	
第2章 知見融合会議による Local X の要素検討	26
(1) 知見融合会議の概要	
(2) 議論のポイント	
第3章 コミュニティ同士の俯瞰が生み出す触発の可能性調査	31
(1) 調査の目的	
(2) 調査結果	
第4章 本調査の取りまとめと今後の展開	34
(1) 産業政策を取り巻く社会環境の変化	
(2) VUCA 時代に求められる Local X の可能性	
(3) 次年度以降の展開について	
資料編	45

序章 本実証・調査の概要

(1) 背景と目的

2022 年度においては、近畿局及び東北・関東・四国局が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす実例として、「地域一体型オープンファクトリー」に着目し、地域企業が群となって「オープンイノベーション 2.0」を体現する要件を報告書にまとめ、この中で、「目指すべき Social Good (※)」が要件の核として機能することを明らかにし、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」という名称で報告書において示唆した。2023 年度においては、取りまとめた結果を活かし、既存の業種や商習慣の枠組みに囚われない国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、以下の要件定義を前提として、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、地域の実例(ロールモデル)を探りながら抽出し、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的とする。

※Social Good

- ・地球環境や地域コミュニティなどの「社会」に対して良いインパクトを与える活動や製品、サービスの総称を指す

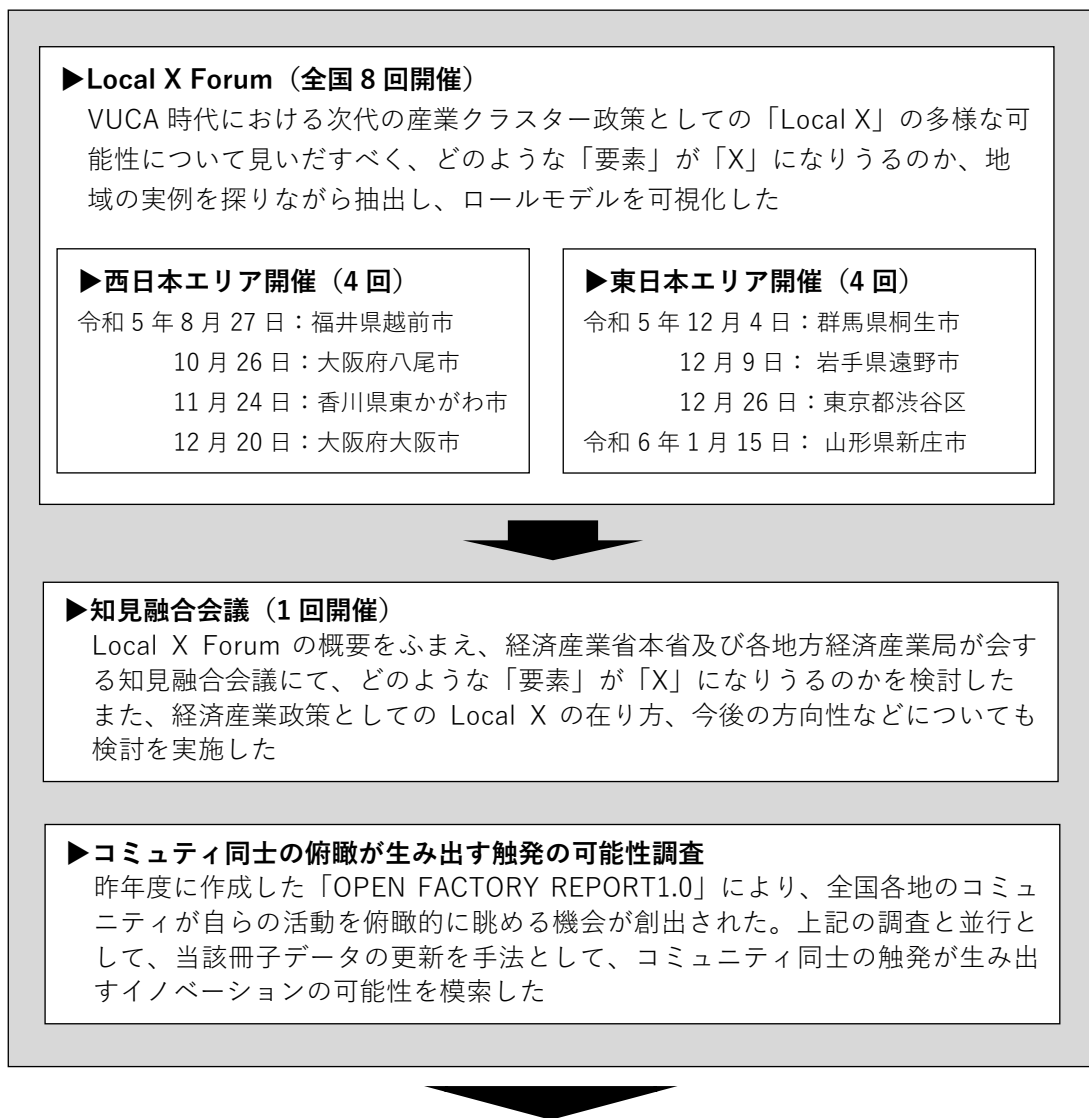
<Local X の要件定義>

- ①従来の商習慣や業種の枠に囚われず、「同じ目的(コア・バリュー)」を持った多様な仲間が集まる「場：コミュニティ」
- ②目的の根幹に「地域の未来 (Social Good))」を持ち、自分たちの力で実現を目指し、継続させる取組
- ③「能動的」に「地域に根付く魅力・ストーリー」について「現場体感」を通して伝える取組

(2) 実証・調査フロー

本実証・調査は、大きく分けると全国各地で8回開催した「Local X Forum（公開討論形式での委員会）」と、それらの成果を取りまとめた「知見融合会議」の2つに分かれる。

〔図表1 本実証・調査の内容及びフロー〕



次代の産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の
多様な可能性を明らかにする

第 1 章

公開討論形式での委員会による Local X の要素検討

(1) Local X Forum（公開討論形式委員会）の概要

VUCA 時代における次代の産業クラスター政策としての「Local X」の多様な可能性について見いだすべく、どのような「要素」が「X」になりうるのか、地域の実例を探りながら抽出し、ロールモデルを可視化することを目的に、全国で計 8 回のフォーラムを開催した。各回の開催概要は以下のとおりである。

回	開催概要（※登壇者及び議論のポイントは後述）
Vol.1	●日時： 2023 年 8 月 27 日（日）14:45～17:00 ●会場： 福井県越前市（武生中央公園内・まさかりどんの館） ●主催： 近畿経済産業局 ●テーマ：「ものづくり」を活かした多角的イノベーションの可能性
Vol.2	●日時： 2023 年 10 月 26 日（木）13:00～15:10 ●会場： 大阪府八尾市（みせるばやお） ●主催： 近畿経済産業局 ●テーマ：「エリア」を活かした多角的イノベーションの可能性
Vol.3	●日時： 2023 年 11 月 24 日（金）13:30～16:00 ●会場： 香川県東かがわ市（ベッセルおおち） ●主催： 近畿経済産業局・四国経済産業局 ●テーマ：暮らしを変えるイノベーションへの挑戦
Vol.4	●日時： 2023 年 12 月 4 日（月）14:30～17:00 ●会場： 群馬県桐生市（桐生商工会議所） ●主催： 近畿経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「選ばれる地域」が生み出すイノベーションの可能性
Vol.5	●日時： 2023 年 12 月 9 日（土）13:00～15:30 ●会場： 岩手県遠野市（あえりあ遠野） ●主催： 近畿経済産業局・東北経済産業局 ●テーマ：「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性
Vol.6	●日時： 2023 年 12 月 20 日（水）14:45～17:00 ●会場： 大阪府大阪市（コングレコンベンションセンター） ●主催： 近畿経済産業局 ●テーマ：「拡張性」を活かした多角的イノベーションの可能性
Vol.7	●日時： 2023 年 12 月 26 日（火）14:00～16:30 ●会場： 東京都渋谷区（東京中小企業投資育成株式会社内・会議室） ●主催： 近畿経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「地域デザイン」を活かした多角的イノベーションの可能性
Vol.8	●日時： 2024 年 1 月 15 日（月）14:30～17:00 ●会場： 山形県新庄市（新庄市エコロジーガーデン） ●主催： 近畿経済産業局・東北経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性

(2) 各回の詳細と議論のポイント

①福井県越前市開催 (Local X Forum Vol.1)

第1回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。なお、開催に当たっては、同日に開催中の地域一体型オープンファクトリーである「千年未来工芸祭」と連携して実施した。

開催日時	●日時： 2023年8月27日(日) 14:45~17:00 ●会場： 福井県越前市(武生中央公園内・まさかりどんの館) ●テーマ：「ものづくり」を活かした多角的イノベーションの可能性 ●事例発表&登壇者： - 株式会社能作 代表取締役社長 能作 千春 氏 - Konel Kanazawa Inc. 代表取締役 宮田 大 氏 - 株式会社友安製作所 代表取締役 友安 啓則 氏 - 有限会社菊井鋳製作所 代表取締役 菊井 健一 氏 ●ファシリテート： - 京都橘大学 経営学部 教授 丸山 一芳 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介(4者) ●公開討論会(パネルディスカッション) ●討論テーマ： - 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.1

開催日時 2023 8.27 SUN 14:45 - 17:00

参加無料

株式会社能作 有限会社菊井鋳製作所

株式会社友安製作所 Konel Kanazawa Inc.

「ものづくり」を活かした多角的イノベーションの可能性

Featuring 関西オープンファクトリー Vol.16

昨年度、近畿経済産業局では、東北・関東・四国等の各所と連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす実例として、「地域一体型オープンファクトリー」に注目し、地域企業が主となって「オープンイノベーション 2.0」を体験する要件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や商習慣の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を模索します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 武生中央公園内 まさかりどんの館
福井県越前市高瀬2丁目27-1
※8月26日~27日開催中の千年未来工芸祭との協賛イベントです。

主催 経済産業省近畿経済産業局
協賛 千年未来工芸祭
後援 株式会社地域計画開発研究所 (アルバック)

■ 討論テーマに対する委員からの意見

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ うまくワークするコミュニティの根源には、楽しさ・楽しみという部分と、**サードプレイスのな場所（本業と直接的には関わらない距離がある場所）**であることが重要である
- ・ 「何となく面白そう」という要素を含んでいることが、成功するコミュニティには共通して必要な要素かもしれない。本業に 100%関係ないかもしれないが、将来的には何らかのフィードバックを得られることが多く、**結果的に本業への還流**が見られる
- ・ 様々なメンバーを集める吸引力には、「**楽しさ**」が重要である。そうした楽しみやわくわく感があることで、持続するコミュニティになっていく
- ・ 目的やアプローチが違って、**同じことを考えている者が連携することが重要である**
- ・ 元気な産地には**中核となる企業や人**がいる

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ **従来はあり得なかった要素を組み合わせることで、イノベーションにつながっていく**
- ・ まったく異なる人が集まり、イノベーションが生まれることが重要である。そのためには、**何か起爆剤になるような取り組み（成功体験）を生むことが重要である**。ケミストリー（化学反応）を起こすこと、**各地の小さな化学反応をつなぎあわせることが大事ではないか**
- ・ **共通目的による信頼関係をもとに、新しい取り組みを進めていくことが大事である。一種の「共体験」を生み出す装置が重要であり、イベントよりも一歩進んだコミュニティが大事である**。そこで新しいイノベーションが生まれていく。Local X とはそうしたコミュニティなのだろう

②大阪府八尾市開催（Local X Forum Vol.2）

第2回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。なお、開催に当たっては、同日から開催された大阪府南部地域を中心とした広域型地域一体型オープンファクトリーである「FactorISM」と連携して実施した。

開催日時	●日時： 2023年10月26日（木）13:00～15:10 ●会場： 大阪府八尾市（みせるばやお） ●主催： 近畿経済産業局 ●テーマ：「エリア」を活かした多角的イノベーションの可能性 ●事例発表＆登壇者： 株式会社みせるばやお 代表取締役社長 木村 祥一郎 氏 株式会社京屋染物店 専務取締役 蜂谷 淳平 氏 『神在月のこども』原作・コミュニケーション監督 四戸 俊成 氏 FactorISM 実行委員会 統括プロデューサー 松尾 泰貴 氏 ※松尾氏はパネルディスカッションより登壇 ●ファシリテート： 株式会社日建設計 企画開発部門 イノベーションデザインセンター 吉備 友理恵 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（3者） ●共創の見方（パーパスモデル紹介） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.2

共通の「見方」

パーパスモデル

京屋染物店

みせるばやお

映画『神在月のこども』

「エリア」を活かした多角的イノベーションの可能性

Featuring 関西オープンファクトリーフォーラム Vol.17

昨年度、近畿経済産業局では、東北・関東・四国等の各府と連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一体型オープンファクトリー」に目し、地域企業が都となって「オープンイノベーション 2.0」を体現する案件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や産業の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「業種」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を掲載します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 みせるばやお

大阪府八尾市光町2-60 リノアス 8F

※10月26～29日開催のFactorISMにご参加いただき次第

主催 経済産業省近畿経済産業局

協力 FactorISM

後援 株式会社地域計画建築研究所（アルパック）

開催日時

2023 10.26 THU 13:00 - 15:10

参加無料

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ FactorISM の場合、最初はヒーローインタビュー形式で他己紹介を行った。**フランクな関係性を作る**ことで、上手くワークするコミュニティを作った
- ・ **ピンチの中で参加者が一致団結**したことで、加速度的に上手くいくようになった
- ・ 参加者が増えることで、コア部分や参加者同士の関係性も変化している。そうした人を巻き込む中で、**変化できる組織という柔軟性**も必要である
- ・ 一緒にやりたいと思ってもらうためには、**ベースプランが必要であり、様々な人が乗れる「余白」が必要である。マスタープランではなく、ベースプランとすることで一種の余白を作っている**。最初から完成形を作るのではなく、**様々な人が参加できる「関わりしろ」**が大事である
- ・ 「里山の縁日プロジェクト」の活動も未完成である。**様々な人が関わることで、面白いものができる**ことがポイント。音楽でいうジャズのように、即興で何かを作り上げることが面白い

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ 本業でない人に外から入ってもらうことが大事である。部外者やよそ者が入ることで、新しい動きが生まれる。そうした面白い人が関わってくれることで、一気にスパークすることができる
- ・ 収益性だけでなく、数値に見えないところも重要である。そこがないと活動は継続していかない
- ・ イベントは収益性だけでは厳しい。**それ以外の見えない部分でどれだけのものを獲得するかが重要である**。お金では測れない部分がある。**お金が介在しない「give」という概念を地域にインストール**した方がよい
- ・ **因果関係がはっきりするようなことだけでは、正直儲からない**。課題が複雑化する現代においては、原因と結果が数値化されていることに、本当に価値はあるのか、と思ってしまう
- ・ ビジネスだと、**チャンレンジする部分と事業の安定性を図る部分**など、機能を分けることも多い。地域活性化のプロジェクトも、様々な機能を組み合わせることが面白い
- ・ これからの産業イノベーションは、「**●●産業**」や「**●●クラスター**」といったキーワードだけでなく、**文化や人々の想いから新しい展開が生まれるかもしれない**。お金以外のものも含めて、余白を作りながら人を巻き込むことが重要なのだろう

③香川県東かがわ市開催（Local X Forum Vol.3）

第3回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。なお、開催に当たっては、同日に開催中の地域一体型オープンファクトリーである「CRASSO（クラッソ）」と連携して実施した。

開催日時	●日時： 2023年11月24日（金）13:30～16:00 ●会場： 香川県東かがわ市（ベッセルおおち） ●主催： 近畿経済産業局・四国経済産業局 ●テーマ： 暮らしを変えるイノベーションへの挑戦 ～今ある地域資源を活かした新たなアプローチ～ ●事例発表＆登壇者： - 株式会社タナベ刺繍 代表取締役社長 田部 智章 氏 - 合同会社シーベジタブル 共同代表 友廣 裕一 氏 - 株式会社 JAPANDEMIC COMPANY 代表取締役 山之内 圭太 氏 - 谷川木工芸 3代目(桶結師) 谷川 清 氏 ●ファシリテート： - 株式会社パソナ JOB HUB - ソーシャルイノベーション部長 加藤 遼 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.3

開催日時 2023 11.24 FRI 13:30 - 16:00

参加無料

地域型オープンファクトリー 事例紹介

株式会社タナベ刺繍 合同会社シーベジタブル

地域型オープンファクトリー 伝統工芸

DD4D BREWING 谷川木工芸

暮らしを変えるイノベーションへの挑戦 ～今ある地域資源を活かした新たなアプローチ～

昨年度、近畿経済産業局を中心に、四国・東土・関東局が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一体型オープンファクトリー」に着目し、地域企業が主となって「オープンイノベーション 2.0」を体験する案件について調査・分析を行ってまいりました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab」として位置付けています。

今年度においては、既存の産業や商賈の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を調査します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 ベッセルおおち イベントホール
香川県東かがわ市馬場 1200
※11月23～25日開催のCRASSOに会場内から参加

主催 経済産業省近畿経済産業局 / 四国経済産業局
後援 CRASSO/2023 実行委員会
協賛 株式会社地域計画推進研究所（アムバタ）

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ 現状維持の考え方があると新しい仲間とやろうと思うこともない上に、新しい仲間と活動すると違和感が生じると思う。その感情をオフできるかどうか、曇り無き目で見られるかどうかで新しい活動が生まれるかが決まってくるだろう
- ・ 崖から飛び降りながらパラシュートを開くといつも言っているが、落ちたらやるしかないで、キレイに着地するようにとりあえずやっている。コミュニティづくりも同じものだと考えている
- ・ ビジネスとしてやっていることの**一つ上のレイヤー**で楽しく生きたい。大きいビジョンが自然になれば仲間も増えてくるので、**そうしたレイヤーで繋がれば新しい化学反応が生まれる**
- ・ オープンファクトリーを目指して、いろんな人が訪ねてくることで、一つの場所で留まっていた人たちの思考が広がっていく。全然知らないところから知らない人が来て、仕事を見てもらって、凄いな、面白いと言われると、**(現場の人の) 思考が変わっていくのが分かる**。そこから変化が始まる
- ・ 面白いと言っている人の目線、眼差しに注目すると、**その人たちが自由な発想で何か創造的な活動をしていく環境を整える**とどんどん面白くなっていく

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ **凹凸な人を集めて**、そういう人たちが持っているものを活かしていけるような環境を目指している。当たり前だったやり方で頑張っても新しいものは生まれづらいし、凹凸があることで生まれるものがある
- ・ **(新しいものには) 革新の文化**がある。ケーキに人参を入れると美味しくできると発明すれば、広く使われるように革新して、文化になっていく

④群馬県桐生市開催（Local X Forum Vol.4）

第4回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。

開催日時	●日時： 2023年12月4日（月）14:30～17:00 ●会場： 群馬県桐生市（桐生商工会議所） ●主催： 近畿経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「選ばれる地域」が生み出すイノベーションの可能性 ●事例発表＆登壇者： - 台東デザイナーズビレッジ 村長 鈴木 淳 氏 - 株式会社 machimori 代表取締役 市来 広一郎 氏 - 辰野町 産業振興課 商工振興係長 野澤 隆生 氏 - ふふふ オーナー 和崎 拓人 氏 ●ファシリテート： - 京都橘大学 経営学部 教授 丸山 一芳 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 地域課題の捉え方と解決に向けたコミュニティとは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.4

開催日時
2023 12.4 MON 14:30 - 17:00

参加無料

インキュベーションオフィス エリアリノベーション
台東デザイナーズビレッジ machimori
修佳 定位発表 地域コミュニティベース
辰野町 ふふふ

「選ばれる地域」が生み出すイノベーションの可能性

昨年度、近畿経済産業局を中心に、関東・東北・四国局が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一体型オープンファクトリー」に着眼し、地域企業が群をなして「オープンイノベーション 2.0」を体現する事例について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や商習慣の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を調査します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 桐生商工会議所
群馬県桐生市錦町三丁目 1-25

主催 経済産業省近畿経済産業局 / 関東経済産業局
後援 桐生市
協賛 株式会社地域計画建築研究所（アールバック）

(i) 地域課題の捉え方と解決に向けたコミュニティとは

- ・ 最初のパートナー探しは重要である。活動の初期は面白い人にインタビューに行き、WEBで発信するという活動を繰り返す中で、次第に地域の人にも心を開いてくれるようになり、理解者も増えていった
- ・ 地域課題解決には、一種のクリエイティブさも必要である。クリエイティブな人とは、**自分の物差しをしっかりと提示して、自分の言葉で語ってくれる人**だと思っている。古さや未完成さを楽しみながら、新しい取り組みにつなげていくことが重要である

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ 「半分行政」で「半分民間」のような立場の人を巻き込むことが重要。私自身が活動している中でも、キーとなる公務員には要所要所で出会うことが多く、**オーガナイザーとしての役割**は重要である。お金じゃない部分で行政には、上手く間を取り持ってもらっている
- ・ 仕事以外でも時間を割いて頑張ってくれる行政担当者、**まちのキーパーソンを多く知っている行政担当者**に火をつけることで、面白い取り組みにつながっていく
- ・ 組織によっては、前例がないものは、大丈夫か？という声もあるだろう。そういった層への対応策としては、**まずは小さくてもトライしてみて、成果を出すことが重要**。少額案件でトライすることから実施して、小さい実績でも積み上げることが大事。**成果を見せることで状況はガラリと変わる**
- ・ 面白い人がさらに人を呼びこんで、面白い活動につながっている印象である
- ・ コミュニティを形成する0→1も重要だが、さらにその先として、**1→10へ移行していくためには、意思を持った人を育成することが大事**だと理解した。それが持続可能な活動につながっていく

⑤岩手県遠野市開催（Local X Forum Vol.5）

第5回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。

開催日時	●日時： 2023年12月9日（土）13:00～15:30 ●会場： 岩手県遠野市（あえりあ遠野） ●主催： 近畿経済産業局・東北経済産業局 ●テーマ：「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性 ●事例発表＆登壇者： - 株式会社富川屋 代表 プロデューサー 富川 岳 氏 - 一般社団法人イシノマキ・ファーム 代表理事 高橋 由佳 氏 - 株式会社京屋染物店 専務取締役 蜂谷 淳平 氏 - FactorISM 実行委員会 統括プロデューサー 松尾 泰貴 氏 ●ファシリテート： - 青森大学 社会学部 准教授 石井 重成 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.5

開催日時 2023 12.9 SAT 13:00 - 15:30

参加無料

あえりあ遠野 2階「さくら」
岩手県遠野市町1-10

主催 経済産業省近畿経済産業局 / 東北経済産業局
岩手県 遠野市
後援 株式会社地域計画建築研究所
（アムバックス）

地域型オープンファクトリー

富川屋

京屋染物店

地域型オープンファクトリー

FactorISM

里山

農家 X 緑地

イシノマキ・ファーム

「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性

Featuring 東北オープンファクトリーフォーラム Vol.3

昨年度、近畿経済産業局を中心に、東北・関東・西国府が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一体型オープンファクトリー」に賛同し、地域企業が主となって「オープンイノベーション 2.0」を体現する条件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・価値を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や産業の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を披露します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ 強烈なリーダーよりも**同列の関係性の人**がゆるやかに集まることが大事だろう
- ・ コミュニティ活動の中心となる人は**地域の良さを良く知った方がよい**だろう。ただ、強烈なリーダーシップがあるだけでは不十分である。「弱い人」がいた方が上手くいくこともある
- ・ 「私はこういった人間だ」、「こういった個性がある」と発信できる人の周りには、人が集まってくる。余白を見せることで、**周りの人間が足りないリソースを補ってくれる**
- ・ キーパーソンに共通するのは、**チャーム（愛嬌）**である。壮大な話をしているが、非常に楽しく親しみやすいと思わせる力はすごい
- ・ コミュニティを作ろうとすると、ほとんどが上手くいかない。**何かしたいこと、パッションに向けて人が集まる方がよい**
- ・ 昔はプロジェクトや目的ありきで、それに足りない人を集めて実行しているスタイルだった。現在はそうではなくて、**その場にいる→何かになっていく、という流れ**が自然になっている
- ・ コミュニティの形成やマネジメントについては、**一般的な仕事の進め方やマネジメントとは違う要素が必要になる**。やりたいこと、ありたい姿というものがある、それに共感する様々な人に関わってもらう中で、プロジェクトが形成されていく
- ・ **失敗を許容する、発案を許容するような奥行き**がないと広がりも生まれない。最初から組織論で固めすぎると、上手くいかない

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ **イノベーションは結果であり、そこを目指しても意味はない**。そこを最大目標に据えるとあまり大きな広がりには生まれない
- ・ **違うものと違うものが混ざりあうことで価値の転換が生じる**。主観と客観が個人の中で上手く混ざりあうことで、イノベーションにつながっていく
- ・ 最初からどうなりたいか、というのが明確な人は少ない。巻き込まれて、実際に進めていくなかで、**自分のポジショニングや他者との距離感など、棲み分けが上手く見えてくる**。まちの中で有機的につながることで、**プレイヤーごとの棲み分け（スキルマップ）**が生まれていく。まちの中でイノベーションを起こすためには、そうしたマップを頭に描きながら、**適材適所でキャストिंगすることがディレクターには求められる**

⑥大阪府大阪市開催（Local X Forum Vol.6）

第6回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。

開催日時	●日時： 2023年12月20日（水）14:45～17:00 ●会場： 大阪府大阪市（コングレコンベンションセンター） ●主催： 近畿経済産業局 ●テーマ：「拡張性」を活かした多角的イノベーションの可能性 ●事例発表＆登壇者： - 江本手袋株式会社 代表取締役 江本 昌弘 氏 - FactorISM 実行委員会 統括プロデューサー 松尾 泰貴 氏 - 一般社団法人 demoexpo 理事 岡本 栄理 氏 - 渋谷ブレンド株式会社 代表取締役社長 細目 圭佑 氏 ●ファシリテート： - 京都橘大学 経営学部 教授 丸山 一芳 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM vol.6

ものづくりのまち 万博

FactorISM demoexpo

事業開発 / カーボンニュートラル 工場

日本 GX グループ 江本手袋

「拡張性」を活かした多角的イノベーションの可能性

Featuring 関西オープンファクトリーフォーラム Vol.19

昨年度、近畿経済産業局では、東北・関東・四国等の各府と連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一休型オープンファクトリー」に着眼し、地域企業が主となって「オープンイノベーション 2.0」を体験する案件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や商習慣の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「産業」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を発掘します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター
大阪府北区大深町 3-1 グランフロント大阪 北館 B2F

主催 経済産業省近畿経済産業局 株式会社地域計画政策研究所（アルバック）

開催日時 2023 12.20 WED 14:45 - 17:00

参加無料

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ **ネガティブな側面をポジティブに転換し、捉えなおすことがコミュニティ活動では大事である。**過去の価値観はネガティブだとしても、現在の状況を正しく理解してもらい、**価値観の転換を図る**ことで、活動にも積極的に取り組んでくれる
- ・ 持続するコミュニティには、失敗を許容できる空気感も必要である。スーパーポジティブな当事者として、前向きに課題解決に取り組むことが大事である
- ・ コミュニティの活動で重要なのは、**様々な人が出会い「発酵」することである。**「ぬか床理論」とも呼んでいる。いいタイミングで、良い塩梅でぬか床を混ぜることで、コミュニティをブレンドして「醸す」ことで、良い風味が生まれる
- ・ コミュニティでの活動の面白さは、**目の前の人と対話することで、ベン図の重なる部分を作ることだ**と思っている。2人だけではなく、3人でセッションした方がベン図の重なりも面白くなる。様々な相手とセッションをしながら、**地域を良くするためにもっとこうしたらよいのに、**ということを考えている時間が面白い
- ・ 万博の価値を正しく発信することで、関西内と外を上手くつなげることができる。**新しい人がたくさん関わる部分（＝関わりしろ）**を作ることが大事である

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ **自分たちが能動的に活動した結果、社会課題が解決できると良い**と考えていたくらいである。**最初から課題解決を目的に活動をしないことが重要だ**と思うし、その方がゆるやかにつながり、長続きすると思っている
- ・ 今日の社会においては、「大きくて予定調和が見えているもの」は大手企業がやればよい話で、**論理と情緒をブレンドしながら、予定調和のない「カオス」を作ることがイノベーターな活動につながる**と思っている

⑦東京都渋谷区開催（Local X Forum Vol.7）

第7回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。

開催日時	●日時： 2023年12月26日（火）14:00～16:30 ●会場： 東京都渋谷区（東京中小企業投資育成株式会社内・会議室） ●主催： 近畿経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「地域デザイン」を活かした多角的イノベーションの可能性 ●事例発表&登壇者： - 合同会社 OULO 代表 赤松 智志 氏 - シソーラス株式会社 代表取締役 荒井 雄彦 氏 - 合同会社シーラカンス食堂 代表 小林 新也 氏 - 有限会社セメントプロデュースデザイン 取締役 / クリエイティブディレクター 三嶋 貴若 氏 ●ファシリテート： - 京都橘大学 経営学部 教授 丸山 一芳 氏
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 地域課題の捉え方と解決に向けたコミュニティとは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM vol.7

会場

シーラカンス食堂

地域産業

セメントプロデュースデザイン

デザイン

シソーラス

コミュニティデザイン

OULO

「地域デザイン」を活かした 多角的イノベーションの可能性

昨年度、近畿経済産業局を中心に、関東・東北・西四国局が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす事例として、「地域一体型オープンファクトリー」に着目し、地域企業が群って「オープンイノベーション 2.0」を体現する要件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や商習慣の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を発掘します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場 投資育成ビル 8階大会議室

東京都渋谷区渋谷 3-29-22

協賛 経済産業省近畿経済産業局 / 関東経済産業局

協賛 株式会社地域計画開発研究所（アルパック）

開催日時

2023 12.26 TUE 14:00 - 16:30

参加無料

(i) 地域課題の捉え方と解決に向けたコミュニティとは

- ・ 仕事につながるか分からないが、**まちや地域の主体と積極的にコミュニケーション**を取りながら関わりを深め、様々な地域課題に出会ってきた。オフィスから自宅まで歩いて10分くらいだが、歩いて家に帰る途中に、様々な人と出会い、日常空間の中で会話が生まれている。**人との出会いの中で、新しいアイデアがどんどん湧いている**
- ・ 地域づくりに関わる人は、**その地域に居続けることが大事だ**と思っている。たまに海外やよその地域に行きたいところもあるが、**まちに居続けることが大事だ**と思っている。継続性を保つためには、そうした人がまちにいたることが大事だと思っている
- ・ 地域にはキーパーソンがいるので、そうした存在と出会うことが大事である。ただ、**コミュニティに入ること自体が目的ではない**。手段と方法を間違えてはいけない。自分がやりたいこと、実現したいことをするためにコミュニティがある
- ・ **外から来た人と地域の人と一緒に未来を語り合い、未来の解像度を高めていく**ことが大事である。まちに関わる人たちが時にリスクも取りつつ、責任を持ちながら取り組んでもらいたい

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ 複雑化する現代社会においては、まずは行動しながら進めていかないといけない。最初から**すべてをデザインするのではなく、アジャイルでやるのが大事**である。まずは、行動しながらデザインしていきたい
- ・ 例えば、海外の方は課題意識が明確であり、様々なことに関心を持っている。アクションも早い。そうした**外からの気づきに触れる中で、デザインのヒントを得ている**のかもしれない。こうした積み重ねにより、業界のイノベーションにつながるかもしれない
- ・ 地域との関わりは人それぞれである。**地域の特性やタイミングによって関わり方も変わる**かもしれない。地域との付き合い方は上手く模索できるとよい
- ・ 濃淡様々な関わり合いからコミュニケーションが生まれるのかもしれない。「**薄い関係**」の方が多く**積み重なる**ことで、イノベティブな活動につながるかもしれない。地域イノベーションもそうした関係値が必要なかもしれない
- ・ 現代は、**思考する人と手を動かす人が分かれる時代だ**と思っている。そうした現状をふまえて、これからローカルに入る人は、**ぜひ地域の中に入って、楽しみながらコミュニケーションを取ってもらいたい**。そこから新しい展開になる

⑧山形県新庄市開催（Local X Forum Vol.8）

第8回開催の詳細及び公開討論でのポイントは、以下のとおりである。

開催日時	●日時： 2024年1月15日（月）14:30～17:00 ●会場： 山形県新庄市（新庄市エコロジーガーデン） ●主催： 近畿経済産業局・東北経済産業局・関東経済産業局 ●テーマ：「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性 ●事例発表＆登壇者： - 吉野敏充デザイン事務所 代表 吉野 敏充 氏 - ユキノチカラプロジェクト協議会 事務局 加藤 紗栄 氏 /ブランドマネージャー 浜野 慶一 氏 - 株式会社浜野製作所 代表取締役 新山 直広 氏 - TSUGI 代表／クリエイティブディレクター /SOE 副理事 石井 重成 氏 ●ファシリテート： - 青森大学 社会学部 准教授
プログラム	●開会挨拶 ●今年度事業と本フォーラムの趣旨説明等 ●各地のキーパーソンによる事例紹介（4者） ●公開討論会（パネルディスカッション） ●討論テーマ： - 上手にワークするコミュニティの要件・要素とは - イノベーションを巻き起こすメカニズム



Local X FORUM Vol.8

開催日時
2024 1.15 MON 14:30 - 17:00

参加無料
Next TOROKU Meetup

登壇者
吉野敏充デザイン事務所
ユキノチカラプロジェクト協議会
浜野製作所
TSUGI / SOE

「地域の価値を活かした共創」が生むイノベーションの可能性

Featuring 東北オープンファクトリーフォーラム Vol.4

昨年度、近畿経済産業局を中心に、東北・関東・四国局が連携し、「共通目的」を持つコミュニティがイノベーションを起こす実例として、「地域一体型オープンファクトリー」に着目し、地域企業が群となって「オープンイノベーション 2.0」を体験する要件について調査・分析を行ってきました。そのうち、地域の特性・個性を活かした Social Good を生み出すコミュニティを「Local X Lab.」として位置付けています。

今年度においては、既存の業種や販路の枠組みにとらわれず、国内地域における「オープンイノベーション 2.0」を加速化させるため、どのような「要素」が「Local X」になりうるのか、各地の実例（ロールモデル）を発掘します。これらを通じて、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター産業としての「Local X Lab.」の多様な可能性を明らかにすることを目的に、各地の様々なコミュニティで活躍するキーパーソンの方々による公開討論会を開催します。

会場
新庄市エコロジーガーデン
「原蚕の杜」多目的ホール
山形県新庄市十日町 6000-1

主催
近畿経済産業局 / 東北経済産業局 / 関東経済産業局
新庄市
株式会社地域計画建築研究所
（アルバック）

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

- ・ 地方の場合、多くのコミュニティでは「地縁」が重要であり、**地元のキーパーソンと上手く付き合っていく必要がある**。個人的には「地縁」と「趣向」のハイブリッドのようなコミュニティが重要だと思っている。「地域内の人」と「外の人」がどう上手く連携するか、交じり合うかという点が重要だと思っている。それぞれのプレイヤーが持つ、**自身の得意分野を持ち寄って、上手く組み合わせる必要がある**
- ・ 一旦、地域から出て時間が経つと、地域に帰ってくると状況は変わっている。そうした時に、いわゆる「おせっかいな人」を介して、地域のキーパーソンとつないでもらったことが非常に有難かった。それが今の活動のベースにもなっている

(ii) イノベーションを巻き起こすメカニズム

- ・ 地域に重要なのは、**本来その地域にはいない「じゃない人」**の存在である。そうした人がいることで、イノベーションを生み出すきっかけになりうる
- ・ **外からの目や外部から刺激によって、内部の人が変わり、イノベーションが生まれていく**。オープンファクトリーに参加している事業者でも、かつては新事業展開など新しい活動に消極的なことも多かったが、消費者や外部の目によって、自分自身の仕事や価値を再認識するようになる。そこからイノベーションにつながっていく
- ・ イノベーションを生み出すには、「**内発的動機**」、「**独断と偏見**」、「**心理的安全性**」の**3つが必要**だと思っている
- ・ 内発的動機とは、流行り廃りではなく、**何とかしないといけないという「想い」が地域にある（圧倒的熱量）**ことが重要である。独断と偏見は、特に産業振興では公平公正は難しいが、施策をブーストさせるためには、**意図的に注力する分野を決めることも重要**である。3つ目の心理的安全性は**相手と話しやすいか、そうした環境があるか**。試行錯誤しながら、みんなで助け合うという相互扶助の精神である。あとは、新しいことに取り組むチャレンジ精神があると前に進んでいく
- ・ 最初からイノベーションを生むことを目的に活動しているのではなく、**あくまで結果論**である。地域を良くしたいという、緩やかな想いから始まっている
- ・ イノベーションは偶発的なものであるが、それを生み出すような**小さなヒーローや成功体験を積んでいくことも重要**である
- ・ コミュニティでのイノベーションには、「**覚悟の連鎖**」というものが**必要**である。私自身も移住を決意して、**新しいことに取り組むという覚悟を決めたことで、地元もそれに応じてくれた**というところである。ある人の覚悟によって、別の人も覚悟を決めるという連鎖である

⑨Local X Forum 開催をふまえた考察

(i) 上手くワークするコミュニティの要件・要素とは

上手くワークするコミュニティにおいては、特に「**場の特性** (①～②)」や「**人の持つ性質・役割** (③～⑤)」の存在が重要となる。それらを整理すると、以下のようになる。

場の特性
①サードプレイスとしての機能 ・あらゆる人が気軽に、フランクに楽しめる場 ・組織や肩書にとらわれないフラットな関係性 など ②地域資源や地域の巻き込み ・その地域が持つ魅力や資源の活用
+
人の持つ性質・役割
③地域外の人の巻き込み ・年齢・性別・国籍等を問わない、地域外の人への参画 ・本来その地域にいない人（「じゃない人」）の参画 ④発起人（キーパーソン）の存在 ・活動やアクションの「仕掛け人」、中核的役割を担う人材の存在 ⑤キーパーソンを支える「理解者」・「サポーター」等の存在 ・キーパーソンの活動をあらゆる側面から支える人材の存在

FORUM 等での声

■サードプレイスとしての機能

- ・ コミュニティは一種のサードプレイスとして機能
- ・ ワークするコミュニティの根源には、楽しさ・楽しみという部分と、サードプレイス的な場所（本業とは距離があるが、**結果的に本業にも還流**）という側面がある

■地域資源や地域の方の巻き込み

- ・ 地域固有の資源を素材としつつ、地域の人にとっても開かれた場所であり、地域の人にとってのサードプレイスになっていることが必要である

■地域外の人の巻き込み

- ・ 専門外や本業でない人に外から入ってもらうことが大事である。部外者やよそ者が入ることで、新しい動きが生まれる
- ・ 凸凹な人を集めて、そういう人たちが持っているものを活かしていけるような環境が大事
- ・ 「地縁」と「趣向」のハイブリッドのようなコミュニティが重要ではないか

■発起人（キーパーソン）の存在

- ・ あらゆる活動には**発起人（キーパーソン）**が必要

■キーパーソンを支える「理解者」・「サポーター」等の存在

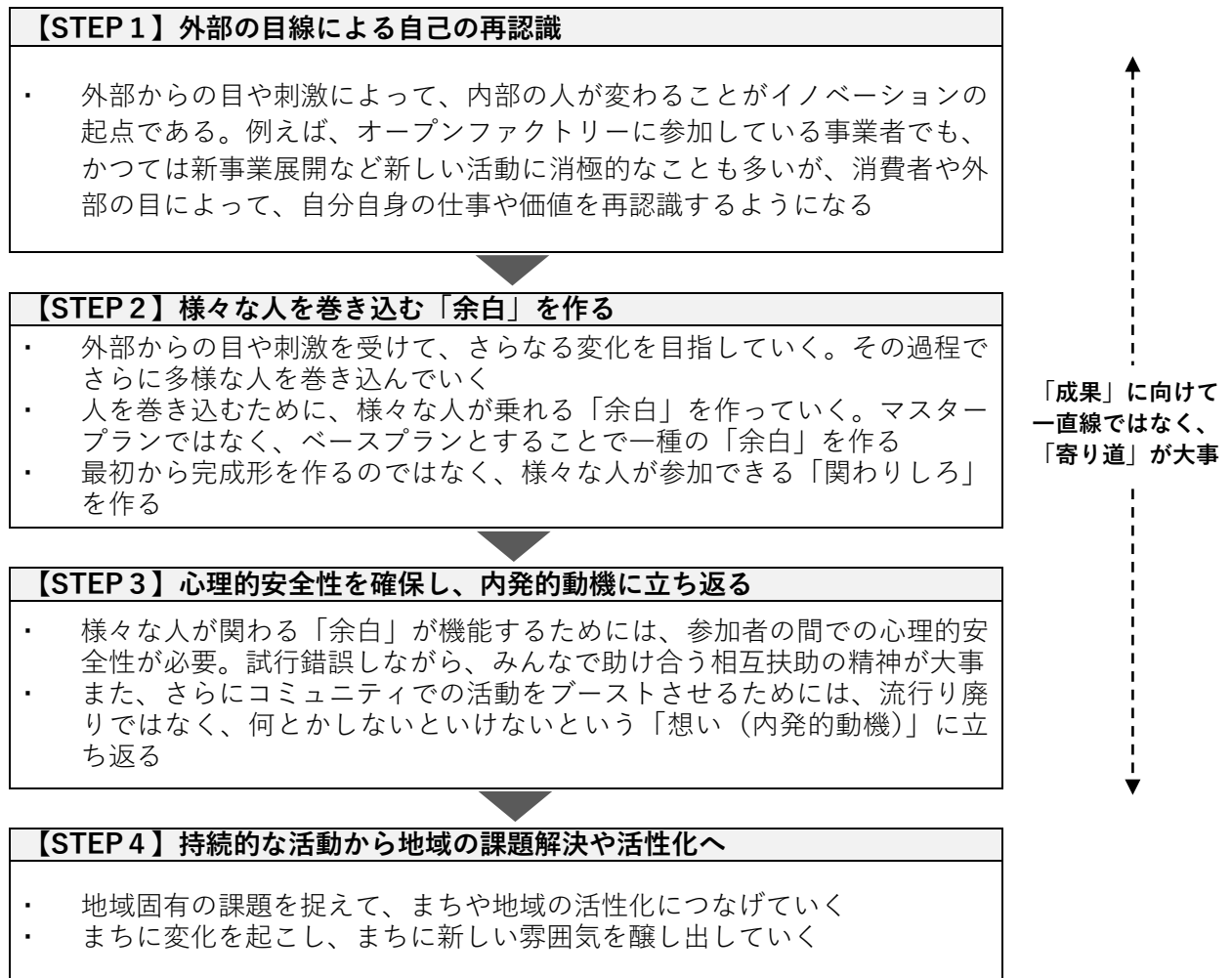
- ・ 「よそ者」であっても果敢に飛び込むことで、地域の「曲者」たちを味方につけることが大事である
- ・ キーパーソンを支える理解者・サポーターなどを増やすことが重要
- ・ 行政のような人と人をつなぐ「**中間的な存在**」（「半分行政」で「半分民間」のような人）も重要

(ii) イノベーションを生み出すメカニズムとは？

コミュニティがイノベーションを生み出すためには、以下のような要素とプロセスが存在することが観察された。イノベーションという「成果」に一直線に向かうのではなく、時に「寄り道」もしながら取組を進めていくことが必要となる。イノベーションを生むコミュニティには、「いる」→「なる」→「する」のプロセスが重要である。

[図表2 イノベーションを生み出すプロセス]

コミュニティの形成・活動スタート（起点）



「成果」に向けて
一直線ではなく、
「寄り道」が大事

成果（イノベーション）の創出へ

※ただし、イノベーションは偶発的に生まれるもの

【イノベーションを生むコミュニティの特徴】 「いる」→「なる」→「する」のプロセスが重要

- 最初から課題解決を強く意識して集まるのではなく、多様な人材が緩やかにつながり、参加するようなコミュニティの方が持続的である
- コミュニティを土台として、様々なアクションを行うことで結果的に成果（イノベーション）につながっていく

【参考】コミュニティ運営の観点～システムティックに取り組む領域の存在～

- ・ イノベーションを生み出すためには、「システムティックに取り組む側面」も重要である。例えば、本業として「稼ぐ領域」と「新たなテーマにチャレンジする領域」を分けることもコミュニティ運営では重要
- ・ 人材確保や組織運営面では専門的な知見やセンスを持つ人材も必要となるが、独自の方法で採用やマッチングを実施するケースも存在
- ・ あえて、デザイン人材など、異色・異質な要素を入れることで、面白い展開を生む「触媒」になっている（例：アート×テクノロジーの融合）

(iii) 「X」が持つ2つの意味（ダブル・ミーニング）

全8回のフォーラムでの議論をふまえると、Local Xの「X」の部分には2つの意味（ダブル・ミーニング）があることが分かった。1つは、それぞれの地域が持つ個性やテーマとして「X」（名詞的なX）と、Local Xというコミュニティに参加する様々な主体が交わる（クロスする）という意味での「X」（動詞的なX）である。

■名詞的な「X」 ※各地のLocal Xの個性やテーマとするもの（可変変数）

Xの性質（分類）	Xとなりうるキーワード
モノ・コト	農業・漁業・里山・雪・ものづくり・伝統産業 万博・映画・休眠特許 など
場所・空間	空き家・廃校・工場 など

} 価値の転換
が必要なもの

■動詞的な「X」 ※様々な主体が交わる（クロスする）ことで生まれる「ズレ」

動詞としてのX
【「余白」を作る】 ・ フランクな関係性／変化できる柔軟性 ・ 様々な人が参加できる「関わりしろ」 ・ 失敗を許容できる空気感／数値に見えないところも重視 【成功体験を生む】 ・ 成功体験を生むこと ・ 小さな化学反応をつなぎあわせる、「共同体験」を生み出す など

} 目線や視点を
「ズラす」

第2章

知見融合会議による Local X の要素検討

(1) 知見融合会議の概要

知見融合会議とは、VUCA 時代における国内の次代産業クラスター政策としての Local X の多様な可能性を明らかにするため、Local X というコミュニティに必要な要素や、コミュニティが魅力的かつ持続的に躍動するために何が必要かといった点について、フォーラムの開催結果をふまえて各地方経済産業局担当者が集い、検討するものである。

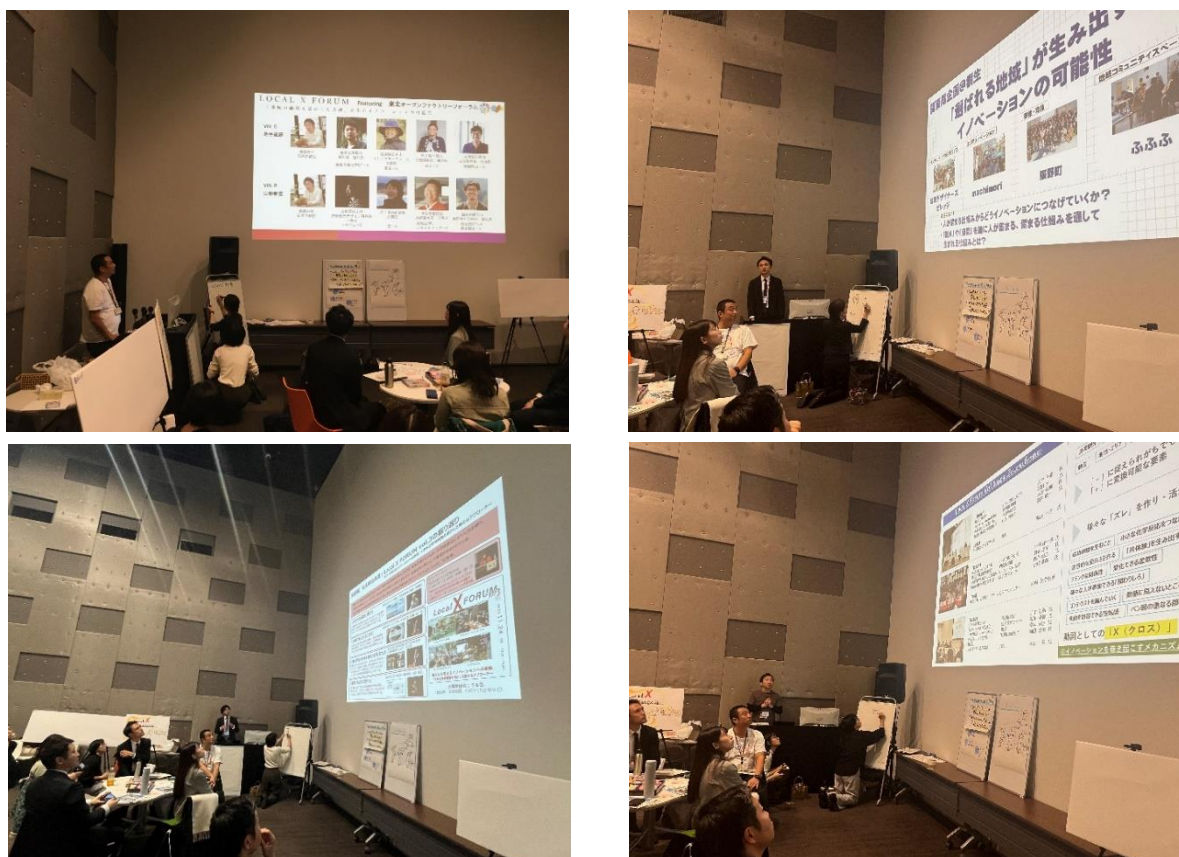
開催日時	●日時：2024 年 2 月 14 日（水）12 時～15 時 ●会場：ナレッジキャピタル ザ・ラボ（アクティブスペース） ●参加：地方経済産業局担当者＋有識者 3 名
プログラム	●各局での Local X の取組共有（インプット） ●ワークショップ ※議論はグラフィックレコーディングで整理 【テーマ 1】 Local X というコミュニティに必要な要素とは？ Local X における共通点や、共通するエッセンスは何か？ 【テーマ 2】 魅力的な/持続的な Local X のために何があると良いか？ Local X を通じてあなたがしてみたいことは？

(2) 開催結果

①各局の取り組みを共有し Local X になり得る要素を抽出する（インプット）

各局からのインプットトークとして、東北・関東・四国・近畿の各局より Local X Forum X の開催報告を実施した。具体的には、各地 Local X Forum における議論の内容とともに、その中で得られた気づきの共有を実施した。

〔図表 3 各局によるインプットトーク〕



②自身の体験に結びつけながら、Local X になり得る要素を深める

前半のインプットをふまえて、ワークショップ形式にて、Local X になり得る要素やどのように活動を継続するか、また今後、参加者自身がどのように関わっていきたいか、といった点を検討した。

■ワークショップテーマ①

- ・ Local X というコミュニティに必要な要素とは？
- ・ Local X における共通点や、共通するエッセンスは何か？

【全般】

- ・ コミュニティの始まりは**楽しみや面白さ、ワクワク感**
- ・ コミュニティには「**わかりやすいビジョン**」が大事
- ・ **キーパーソン（仕掛け人）の存在とそれを支える人たちが**必要
- ・ 最初から成功ありきではなく、**まずは緩やかにスタート**することが大事
- ・ 失敗に対しても許容できる空気感（**心理的安全性**）が大事
- ・ 何でもやってみよう/相手の邪魔をしないという**グランドルール** など

【場の性質】

- ・ 様々な人が参加できる**余白**が必要
- ・ **何かが見つかる、ここに行けばよさそう！**という場
- ・ 人を見つけに行く場 など

【マインドセット/風土】

- ・ キーマンの信念がコミュニティ共通の理念となっている
- ・ キーマンの信念/コミュニティの理念が地域に根ざしている
- ・ **お尻をだせる寛容さ**がある
- ・ **共感性/人間臭さ**がある
- ・ 「**どうにかしなきゃ**」のマインド など

【仕組み面】

- ・ **無理のない運営**をしている
- ・ 変わっていく**柔軟性**がある
- ・ **アート要素／美的センス／デザイン**へのこだわり／見せ方がある
- ・ 見えない部分も含めて美しい
- ・ 尖った人を受け入れられるように、大きなコミュニティの中に**小さなコミュニティ**を作る
- ・ アメーバ型の中に軸やテーマがある
- ・ 地域課題と情報を持っている役所とのマッチング など

【その他（キーパーソンの特徴）】

- ・ ワクワクが止まらない/**楽しい**
- ・ きちんと**マネタイズ**を考えている
- ・ 未来への責任が持てる
- ・ 夢を持っている/未来を語れる/先をみている
- ・ **美的センス**がある
- ・ 「**ビジョン/課題/自分ごと**」が繋がっている など

■ワークショップテーマ②

- ・魅力的な/持続的な Local X のために何があると良いか？
- ・ Local X を通じてあなたがしてみたいことはあるか？

【魅力的な/持続的な Local X のために必要なこと】

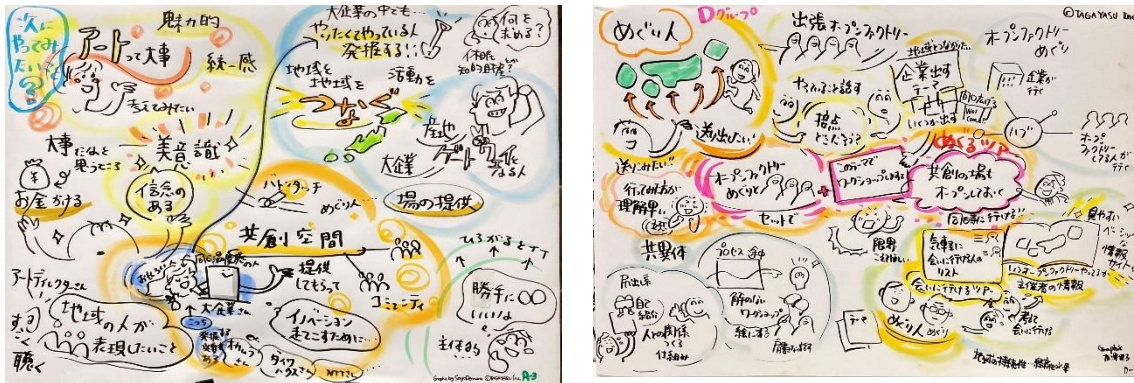
- ・プロジェクトを進める上では、**大企業**の存在も大事
- ・コミュニティと同様に、大企業側にも同じような信念や理念を持つ、温度感が似たような人が参画すると継続する
- ・**オープンファクトリーとセットで共創の場をオープン**することも重要
- ・これまで**アプローチできていない主体を取り込んでいく**ことが大事
- ・同じものをそのまま引き継ぐのは難しいだろうし、**後任者が自分のカラーを出しながら変えていく**ことも大事
- ・**地域と地域をつなぐ**視点も重要
- ・やっていることの**要素化・因数分解**
- ・主催者の情報が載っている見やすいベーシックな**情報サイト**
- ・**気軽に会いに行ける人のリスト**の作成

【Local X を通じてあなたがしてみたいこと】

- ・**Local X 同士の交流**が大事。例えば、地域を超えて、関西企業が東北に行って現場を見てもらうような仕組みを作りたい
- ・例えば、**オープンファクトリー同士のめぐり逢い（めぐり人を作る）**をしたい。各地がつながることで、イノベーションにつながる。オープンファクトリーツアーでは、産地の中小企業だけでなく、大手企業も参加してもらいながら、双方でコミュニケーションを取れる空間だと良い
- ・**Local X × 万博**を軸に人の輪を広げたい。大企業等も入ってもらいながら、新しい風を吹き込んでいきたい
- ・グランプリなど、日の目を浴びる機会を作りたい
- ・軸・信念・ストーリー・想いを持った継ぐ人のメンタリングと人材育成
- ・子どもたちの探究学習へ取り入れる（**次世代へつなぐ**）

[図表 4 グラフィックレコーディングでの議論の可視化 (協力: 株式会社たがやす)]

■次年度以降にやってみたいこと



■総評



第3章

コミュニティ同士の俯瞰が生み出す触発の可能性調査

(1) 調査の目的

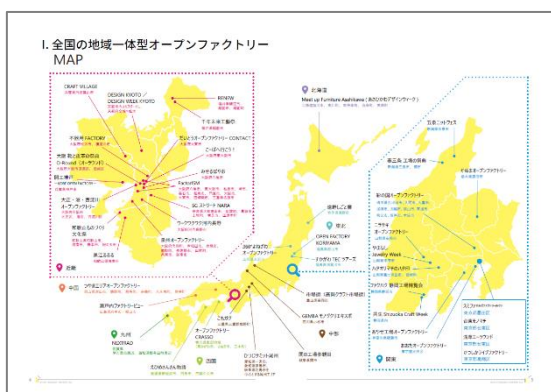
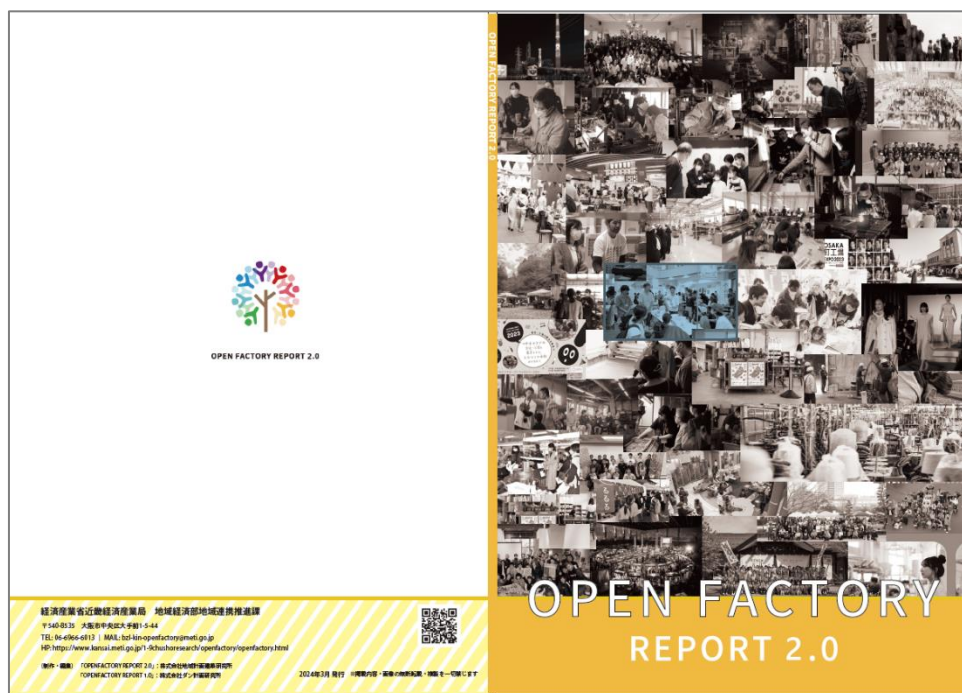
昨年度に作成した「OPEN FACTORY REPORT1.0」により、全国各地のコミュニティが自らの活動を俯瞰的に眺める機会が創出された。上記の調査と並行として、当該冊子データの更新を手法として、コミュニティ同士の触発が生み出すイノベーションの可能性を模索した。

各所のオープンファクトリー関係者に対しては、他所事例の確認を依頼するとともに、自身の団体・活動を改めて俯瞰しブラッシュアップすべき点について、各所へ検討を依頼した。それらの調査結果を取りまとめて、「OPEN FACTORY REPORT 2.0」として冊子の再編集を実施した。

(2) 調査結果

各所のオープンファクトリー関係者からの気づきや更新情報等を反映して、OPEN FACTORY REPORT 2.0として再編集を行った。また、新たに活動を開始したオープンファクトリーについては、新規で紙面作成を行った。

[図表 5 OPEN FACTORY REPORT 2.0]



各所のオープンファクトリー関係者からの回答状況をもとに、触発の可能性調査のポイントを整理すると以下のようになる。

ポイント①

活動的なオープンファクトリーと更新情報量の比例関係

- ・ 毎年のように定期的に行っているオープンファクトリーでは、記載する内容や写真など多くの更新がみられた（他所の事例もみながらブラッシュアップ）

ポイント②

新しく立ち上げたオープンファクトリーほど多様な関係者が参画

- ・ これまでの地域一体型オープンファクトリー事業を通じて、多様な人材の巻き込みの重要性を発信してきたが、そうした成果もあり、近年新しく立ち上げられたオープンファクトリーほど、当初から多様な関係者を巻き込む傾向がみられる

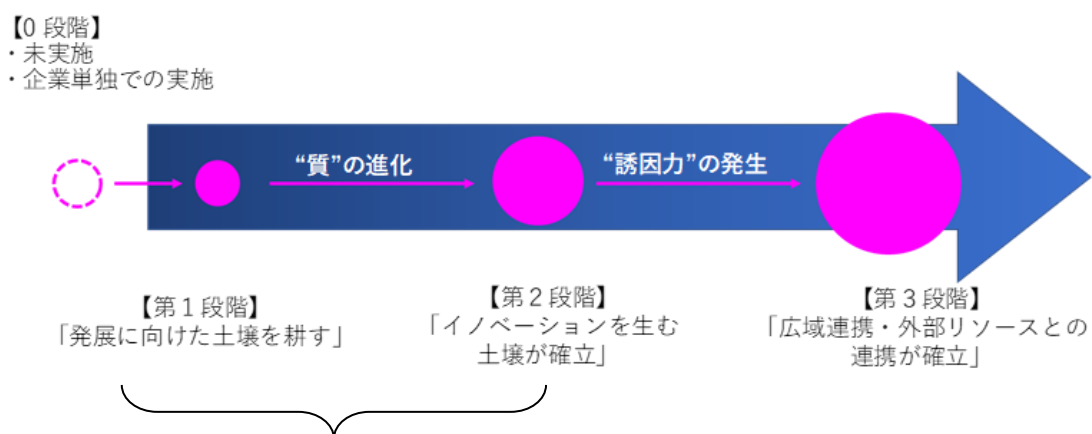
ポイント③

今年度に検証した Local X の要件・要素を兼ね備える主体が増加

- ・ Local X の要件・要素に関わるような取組・活動を展開しているオープンファクトリーが増加しており、今後の発展や各地の結びつきが期待される

上記に加えて、各地のオープンファクトリーが自らの活動を俯瞰的に眺める機会が創出されたことで、「令和2年度 関西におけるオープンイノベーションを創出する地域一体型オープンファクトリーの発展可能性事例調査」に示されている発展モデルのうち、初期段階をブレイクスルーするきっかけとなっていることがうかがえる。各地のオープンファクトリー全体の底上げ（レベルアップ）のためにも、こうした冊子形式による取組の可視化は非常に有効であることが分かった。

〔図表 6 地域一体型オープンファクトリーの発展モデル〕



〔出所〕 近畿経済産業局「令和2年度 関西におけるオープンイノベーションを創出する地域一体型オープンファクトリーの発展可能性事例調査」

第4章

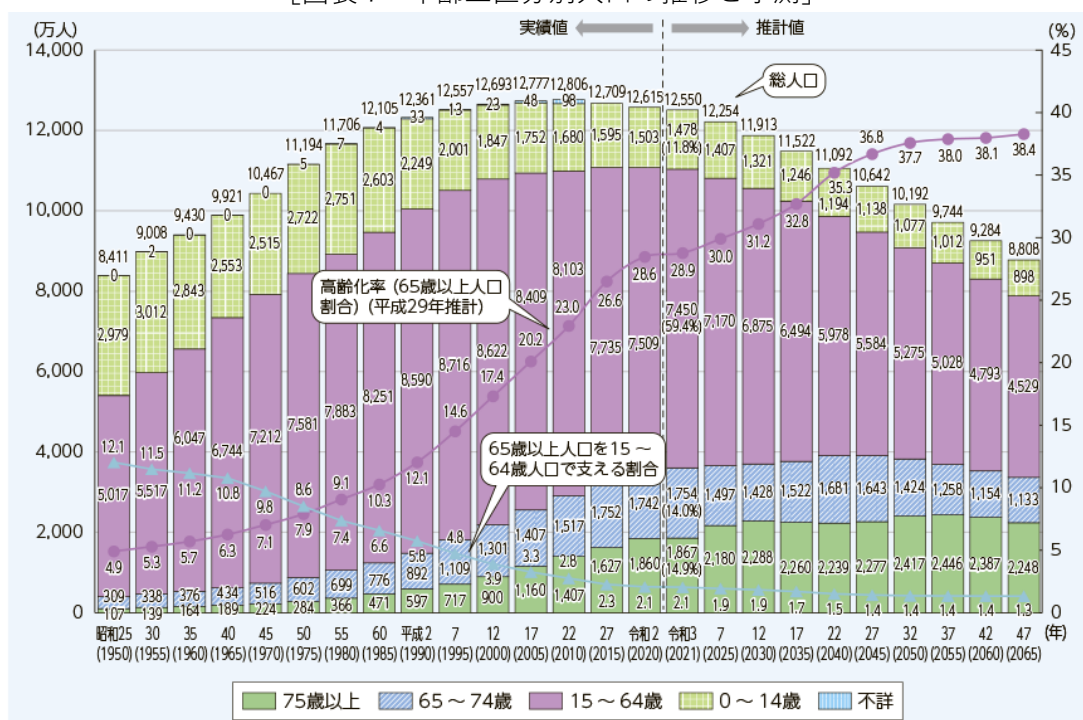
本調査の取りまとめと今後の展開

（１）産業政策を取り巻く社会環境の変化

次代の産業クラスター政策としての「Local X」の可能性に着目すべき背景には、国内の社会構造の変化や情報通信メディアの利用拡大、また国際的にも不確実性が増大する時代ということがある。

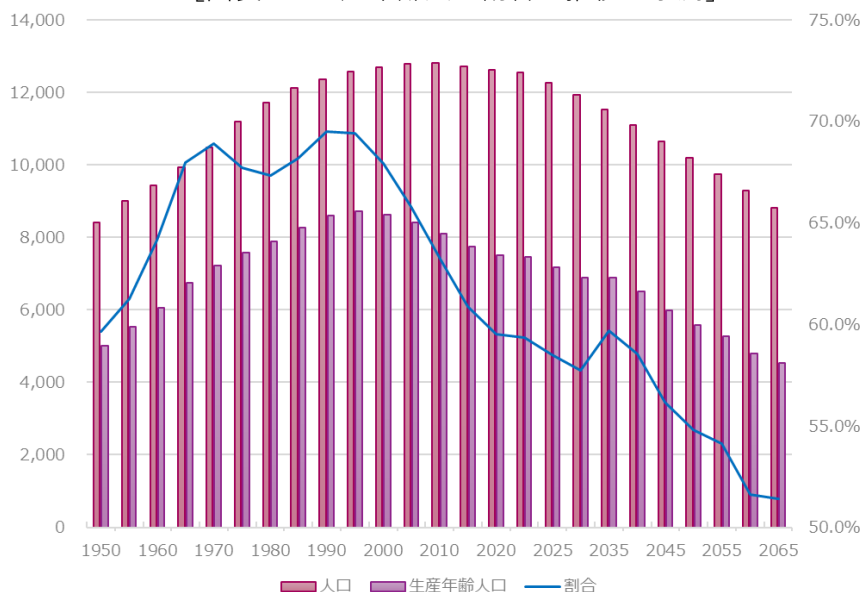
国内の社会構造の変化では、まず総人口の減少がある。総人口の推移をみると、2010年の1億2,806万人を頂点に減少に転じており、2065年には8,808万人まで減少すると予測されている。人口構造の中でも、生産年齢人口（15歳～64歳）は1995年の8,716万人を頂点に減少傾向であり、総人口に占める割合も1995年以降、急速に低下している。

〔図表 7 年齢三区分別人口の推移と予測〕



〔出所〕 内閣府「令和 4 年版高齢社会白書」

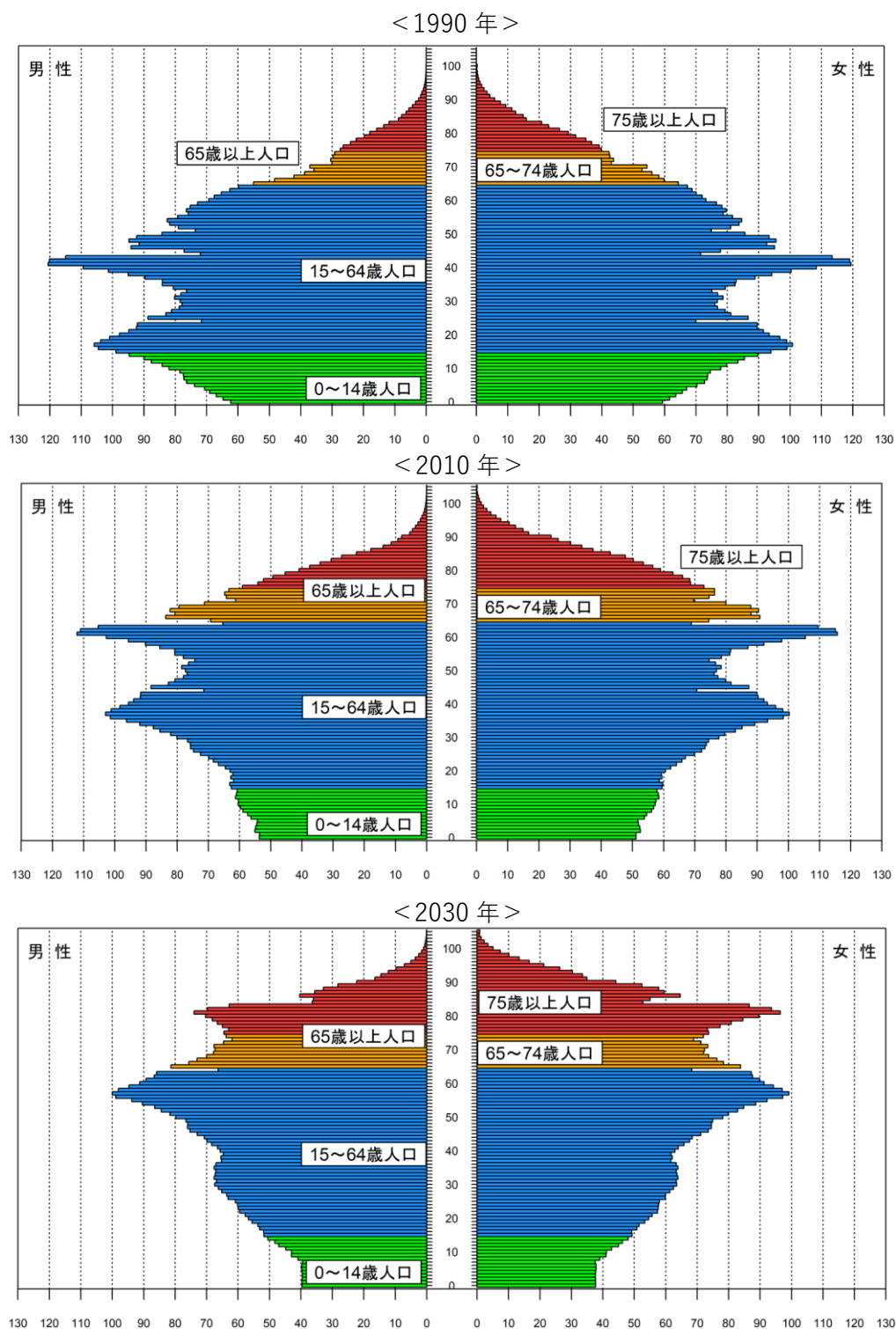
〔図表 8 生産年齢人口割合の推移と予測〕



〔出所〕 内閣府「令和 4 年版高齢社会白書」より加工

また、人口構造について、1990 年以降の人口ピラミッドを見てみると、総人口の減少（ピラミッドの総面積の減少）とともに、生産年齢人口の減少が特に顕著であることが分かる。

〔図表 9 日本の人口ピラミッド〕

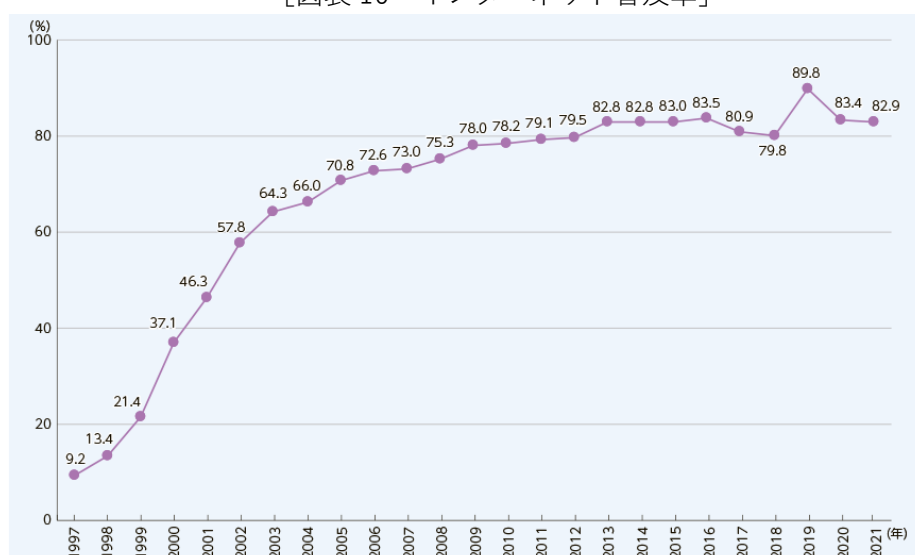


〔出所〕 国立社会保障・人口問題研究所 日本の将来推計人口（平成 29 年推計）

加えて、近年の情報通信手段の多様化により、情報の伝達速度と収集方法に大きな変化が生じている。1990年代に普及したインターネットを皮切りに、情報通信技術を活用した様々なアプリケーションや情報交換ツールが普及している。あらゆる人が情報にアクセスすることが可能となり、情報収集やストックの方法も大きく変化している。

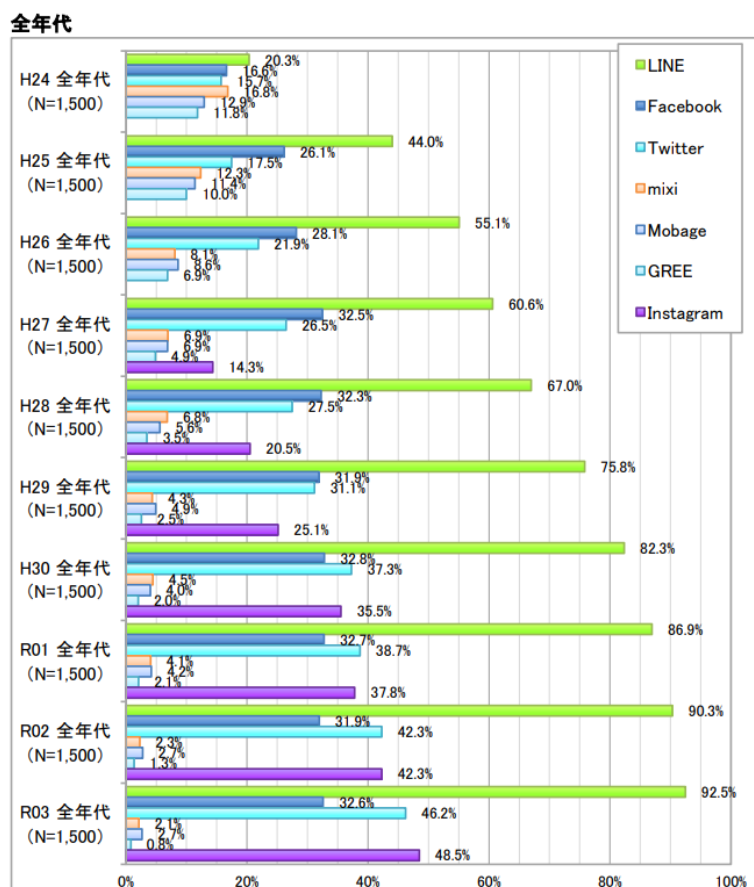
インターネット普及率は2010年代以降に8割を超えており、様々なアプリケーションやSNS等の利用も拡大している。あらゆる人が情報通信技術を活用して、自由に情報発信や他者とのやりとりが可能な時代となっている。

[図表 10 インターネット普及率]



[出所] 総務省「通信利用動向調査」

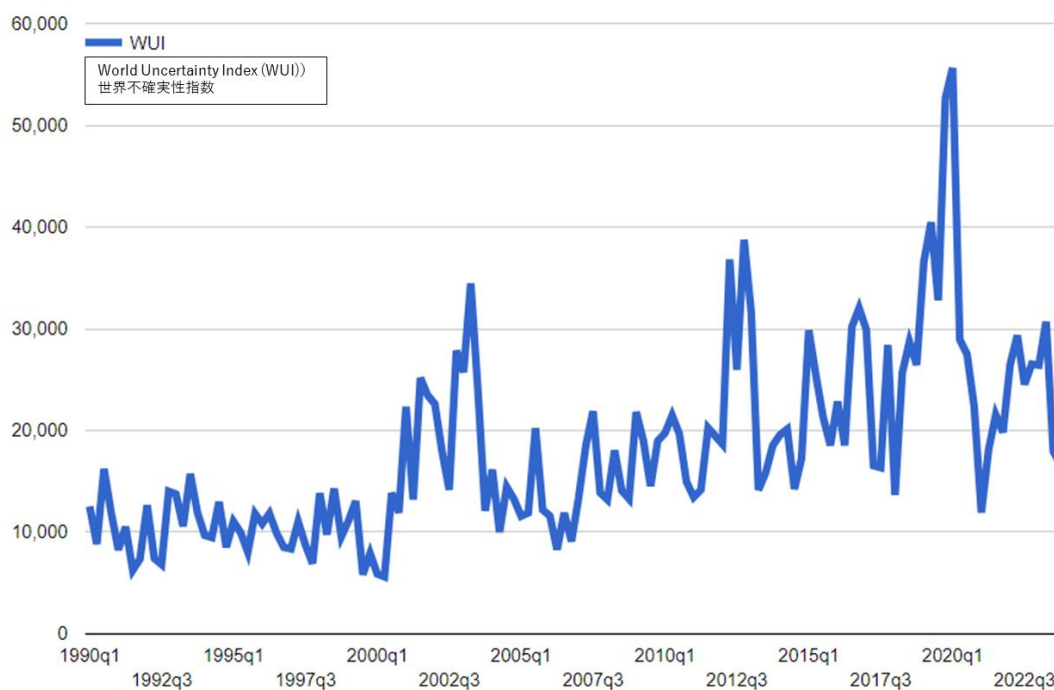
[図表 11 主なソーシャルメディア系サービス/アプリ等の利用率]



[出所] 総務省「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」

一方で、近年は VUCA という言葉に代表されるように、不確実性が増大する時代となっている。国際通貨基金（IMF）による World Uncertainty Index：WUI（世界不確実性指数）の推移をみると、特に近年は不確実性指数が大きくなっている。

〔図表 12 世界不確実性指数（WUI）の推移〕



〔出所〕 IMF World Uncertainty Index (WUI): Global (1990 Q1 to 2023 Q4)

〔注〕 WUI 算出方法

143 か国を対象とするエコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）の国別報告書に関して、テキストマイニングにより、uncertain（不確実性）又はその変形型が全体に占める割合を計算して算出。この数値に 100 万をかけてスケールを調整している
数値が高くなるほど、不確実性が「高い」ことを示す

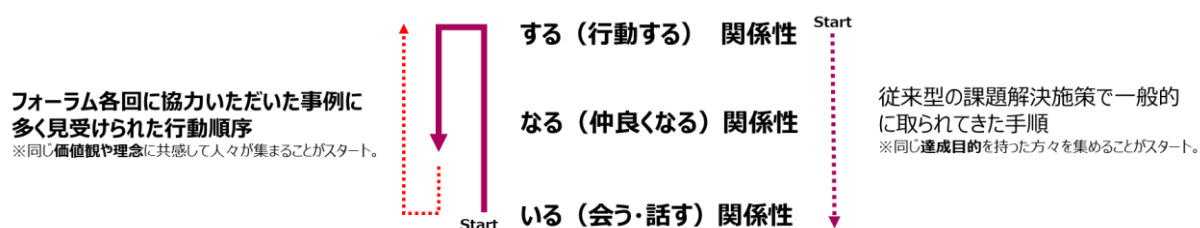
(2) VUCA 時代に求められる Local X の可能性

①Local X=コミュニティを起点とするアプローチ

全国計 8 回のフォーラムにおいて、各地で様々な課題解決を体現する Local X のキーパーソンに登壇を頂いた。活動する地域や内容は異なるものの、それぞれに共通する部分は、従来のような課題解決自体を目的として集まった集合体ではなく、人に会いたい、話したい、つながりたいという動機付けから緩やかなコミュニティを形成し、そのうえで特定の目標を持って行動するという点に特徴がみられる。

課題解決のアプローチには様々なものが存在するが、Local X で観察されたアプローチはこれまでとは違う手法であることがうかがえる。具体的には、コミュニティを形成する際に明確な目的や目標値のもとに人が集まる（場合によっては集められる）のではなく、コミュニティという場所に集い・話す（＝いる）という状態からスタートしている点に特徴がある。従来型の課題解決手法では、目的や目標値が明確であり、それらに取り組むために人が集まる（集められる）という手順が多くみられるが、こうしたフローとは反対のアプローチとなる。

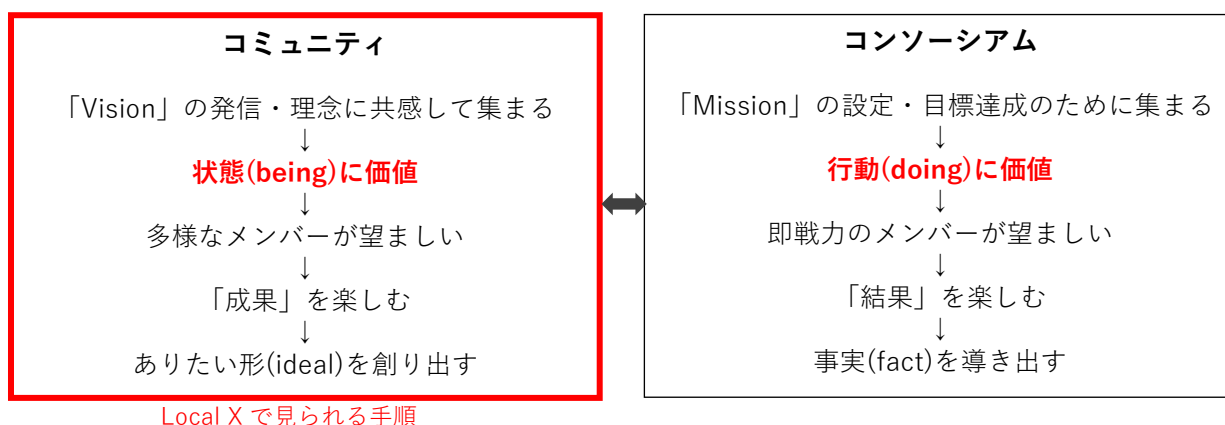
[図表 13 課題解決アプローチの違い（従来型 vs Local X（コミュニティ型）]



[出所] Local X Forum での議論等を通じて構築

従来までの課題解決手法として、「コンソーシアム」という形式が採用されることが多く、取り扱うテーマの大きさや難易度によっては有効に機能しているが、昨今の VUCA 時代に代表されるような不確実性の高い時代においては、より迅速かつ柔軟に対応できる仕組みが必要となる。Local X という「コミュニティ」は、こうした課題に対応する新たなアプローチとして有効ではないかと推測される。

[図表 14 コミュニティとコンソーシアムの違い]



[出所] Local X Forum での議論等を通じて構築

各地のキーパーソンの事例を考察すると、Local では、まず「Vision（理念）」の下に「コミュニティ」が形成され、多様なメンバーが「楽しさ」と「寛容性」を持ちながら、地域のありたい形（ideal）を創り出している。そして、その形成されたコミュニティのメンバーが様々な地域課題を発見し、行動に移していくことで「成果」を出していく。

また、地域内外を問わず、多様なメンバーが参画することから、様々な視点から課題が発見されていく。そうして、コミュニティの中で様々なチームが立ち上がり、試行錯誤しながら「成果」が次々と生まれることで、アクティブなコミュニティとして変化していく、というプロセスがみられた。当初から課題解決を行うことを目的とせず、多様なメンバーが集い、触発される中で課題を発見し解決していくというプロセスが重要であり、その意味でイノベーションは目的ではなく、結果論であるという声が多く聞かれた。

②新たな産業政策としての Local X の可能性

こうしたコミュニティを出発点とする課題解決アプローチは、これまでの産業政策とは異なる次世代の政策展開につながっていく可能性がある。Local X というコミュニティを起点とするアプローチで政策検討を行った場合、従来までの産業クラスターとは異なる、新しい政策アプローチがみえてくる。

[図表 15 政策アプローチの違い（従来型 vs 次世代）]

	従来型産業政策 (コンソーシアム型産業集積)	次代の産業政策 (コミュニティ型産業集積)
始まり	目的	理念
目指す先	結果	ありたい姿
不確実性への対応	不向き	向いている
既存施策の活用	使いやすい	使いにくい

[出所] Local X Forum での議論等を通じて構築

[Local X のアプローチはこちら](#)

従来型産業政策では、特定の明確な目的のもとに、各種主体が集まり（集められる）、多くの場合は定量化された目標水準を達成するために、活動することが多い。特定の目的のもとに活動しているがゆえに、当初想定しなかったような変化（＝不確実性の増大）が生じた場合、各種主体が機転を効かせて、そうした変化に迅速に対応することは難しい。

一方、Local X のようなコミュニティ型（人と人のつながりを起点）では、活動理念への共鳴やあるべき社会・地域の姿を追求することが多く、参加者が互いを良く知る関係性を持ち、多様な能力を持った人材が集っていることで、不確実性にも迅速に対応することが可能となる。前節でみたように、不確実性が増大する時代の中においては、コミュニティを起点とするアプローチはより重要になってくる。

Local Xのようなコミュニティを起点とするアプローチでは、個々の地域の特性や事情を熟知したメンバーが関わることから、行政がこれまでアプローチすることが難しかった領域（例：地域社会に深く根差した複雑な課題等）への対応も可能となることも期待される。多様化・複雑化する地域課題のすべてに行政が対応することは難しいため、Local Xのようなコミュニティを通じたアプローチは今後重要になってくることが予想される。

③Local Xにおける「価値」の可視化への試み

Local Xのようなコミュニティは、地域内外の様々なメンバーが参加するという「状態（being）」に価値があるものだが、そうした状態をベースに、Local Xを通じて生み出される課題解決への取組（＝ここでは「コンソーシアム」と呼称する）も重要である。そうしたコミュニティとコンソーシアムの関係性を表現すると、以下のようになる。

〔図表 16 コミュニティとコンソーシアムの関係性〕



〔出所〕 Local X Forum での議論等を通じて構築

上記のように、Local Xというコミュニティ（状態）を土台として、その上に各種の課題解決の取組（コンソーシアム）が「載る」という構図になる。生み出されるコンソーシアムは一つとは限らず、Local Xに参加する様々なメンバーが課題を発見していくことで、多様なコンソーシアムが上に載っていくことになる。また、コミュニティの裾野が拡大（例：新しいメンバーが参加）することで、新しいコンソーシアムを上に乗せることも可能となる。

Local Xのようなコミュニティはその「状態」に価値があるものではあるが、Local Xを通じて生み出された価値はコンソーシアムと関連付けることで、その価値を可視化することにもつながる。それらを仮に表現するとすれば、「**コンソーシアムで創出された価値の総和**」と取組から形成される「**暗黙知**」の総和が「**コミュニティの価値**」と捉えられるのではないかと考察する。

（３）次年度以降の展開について

以上、みてきたように、社会の風向きの変化や不確実性が増大する時代においては、Local X のようなコミュニティ型での課題解決アプローチがますます重要になってくる。社会を取り巻く状況が大きく変化する中で、時代に即した課題解決の手法として Local X に期待される役割は大きく、その有効性も含めて実証レベルでの展開が必要である。

[図表 17 社会の風向きの変化]

【これまでの社会】

- ・ 人口増(価値の需要者)とともに生産年齢人口(価値の供給者)が増加
- ・ 情報の伝達速度が遅い。加えて、インターネット普及期においては溢れる情報の整理が必須であることから、組織等を介した情報伝達の重要性が存在
- ・ 成功事例(ロールモデル)に基づく手法の波及(海外→都市部→地方)で多くの課題を解決



【いま、そしてこれからの社会】

- ・ 人口減(価値の需要者)の減少率以上に、生産年齢人口(価値の供給者)の減少率が高い
- ・ 情報の伝達速度が早く、かつソーシャルメディア等の活用により、それぞれの感性で情報取得や発信が可能
- ・ 本格的な VUCA 時代の到来により、社会や地域は不確実性の高い課題に晒され、過去の成功事例が通用しない時代
- ・ 不確実な課題解決に向けては、多様な「個性」と背景を持つ人が集い、迅速に共創できる場（＝コミュニティ）が活きる
- ・ そうした場にヒト・モノ・カネが集まり、新たなチャレンジが促進される

このように次世代クラスター形成につながる可能性のある Local X について、今後さらなる広がりをもたせるためには、この領域で活躍する各種主体を支援する仕組みが必要である。

一方で、現在の一般的な行政の支援施策は活用が難しいことも予想される。行政予算の組み立て上、前年度に要件設定されて準備されるためである。行政の予算要求の形を直ちに变化させることは難しいこと、また従来の産業政策も依然重要（国家プロジェクトなど予算規模が大きいもの）であることから、Local X への支援体制を別途検討することが重要になる。

その一つの方角性となりうるものが、近年こうした主体との連携やコラボレーションを進めている「大企業」や「地域金融機関」といった存在である。社会・地域課題の解決が自社のビジネスや自地域の成長につながるといった「利益」を享受する主体は、支援主体になりうる可能性がある。こうした方角性は、日本企業の「価値創造経営」を促進し、社会課題解決を通じた成長戦略を策定することで成長期待を高め、持続的に企業価値を向上させるといった、近年の経済産業政策における「新機軸（※）」での議論とも合致するものである。

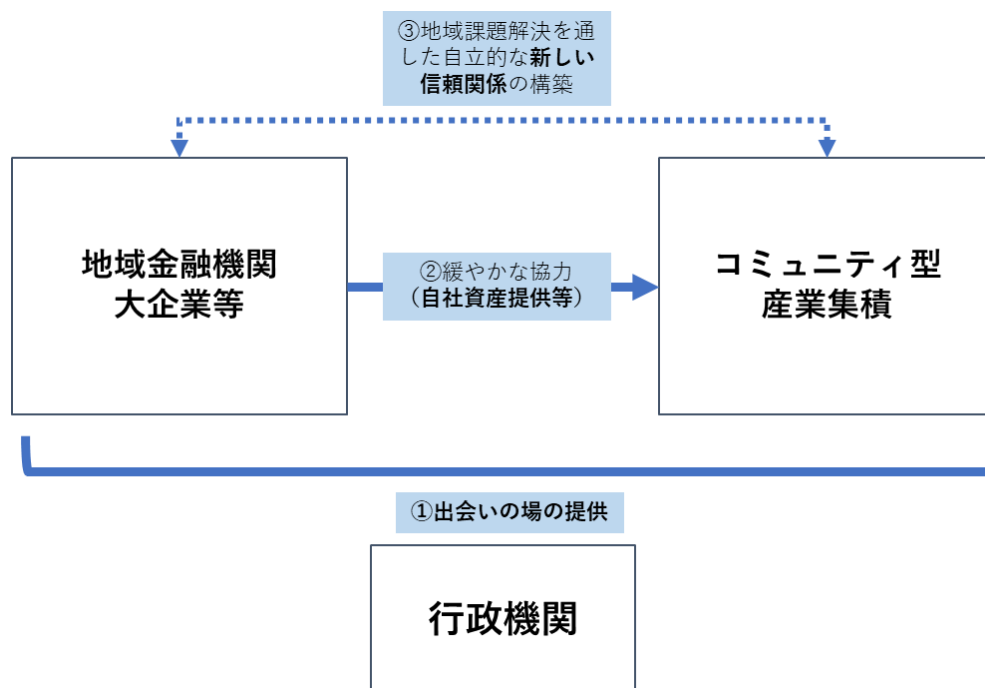
※経済産業省「経済産業政策新機軸部会」での議論など

https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/shin_kijiku/index.html

なお、連携当初から資金的提供を Local X に対して行うことは企業心理的にも容易ではないと考えられることから、大企業等が自社の持つ有形無形の資産（金銭以外）を Local X に提供するきっかけを作ることが、「敷居」を下げる取組として機能し、大企業等と Local X コミュニティの関係性の変化を促す可能性があるものと考察する。

こうした新たな社会的関係性の構築に向けて取り組むことで、新機軸で求めているテーマ横断的な社会基盤の組み替えにも寄与することが期待される。

[図表 18 地域金融機関・大企業等とコミュニティ型産業修正の連携]



資料編

本事業で活用した主な調査レポート・文献等は以下の通りである。

<活用した調査レポート・文献等>

- ・経済産業省近畿経済産業局「令和2年度 関西におけるオープンイノベーションを創出する地域一体型オープンファクトリーの発展可能性事例調査」
- ・経済産業省近畿経済産業局「地域一体型オープンファクトリー等を中心とした地域企業群の『予定調和のない共創』を繋ぐ『ナレッジシェア・ポート（知識移転の場）創出』実証事業 報告書」
- ・経済産業省近畿経済産業局「OPEN FACTORY REPORT 1.0」
- ・国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」
- ・総務省「通信利用動向調査」
- ・内閣府「令和4年版高齢社会白書」
- ・総務省「令和3年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」
- ・IMF「World Uncertainty Index (WUI): Global (1990 Q1 to 2023 Q4)」

謝辞

本調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力をいただきました。ここに、心より感謝の意を表します。

令和5年度 次代の産業クラスター政策としての
「Local X Lab.」事業の発掘、磨き上げ実証事業

令和6年3月
経済産業省 近畿経済産業局
(調査委託機関：株式会社 地域計画建築研究所)

二次利用未承諾リスト

報告書の題名
令和5年度 次代の産業クラスター政策としての「Local X Lab.」事業の発掘、磨き上げ実証事業

委託事業名
令和5年度 次代の産業クラスター政策としての「Local X Lab.」事業の発掘、磨き上げ実証事業

受注事業者名
株式会社地域計画建築研究所

頁	図表番号	タイトル
P38	図表12	世界不確実性指数（WUI）の推移